

光り輝く活動を行っている「羽村人（はむらびと）」を紹介します。

問合せ 広報広聴課広報係☎505



▲子どもたちは榎田さんのことを親しみを込めて「くっしー」と呼ぶ。先生でも友達でもない不思議な信頼関係が築かれている。



子どもの未来を育む

造形教室 こどものにわ主宰
榎田 拓哉

「アート&育み&日常」をテーマに一風変わった造形教室を主宰し、今全国から注目を集めている榎田拓哉さんを紹介いたします。榎田さんの思い描く「子どもたちの未来」とは。

えるが、作品作りに注文をつけることはない。「子どもたちは驚くほど感性が豊かで、純粋で、好奇心に溢れています。自由な発想力をうまく引き出してあげると、子どもの表現はものすごく豊かなものになるのです。」と榎田さんは言う。

失敗も「過程」として受け入れる

幼いころから物を作ったり絵を描いたりすることが大好きだったという榎田さん。幼稚園で工作の時間に一生懸命作った作品を「向きが間違っている」という理由でやり直させられたことが嫌な記憶として強烈に残っているそうだ。『こどものにわ』では『失敗』や『優劣』という考えがありません。『壊れる』『ぼれる』『汚れる』といった思い通りにならなかったことや失敗として認識されがちなことも『過程』として受け入れます。子どもたちの知的好奇心と予測不可能な結果へのワクワク感やドキドキ感こそが『楽しい』を生むのだと思います。

4年前から「こどものにわ」に通っているという女の子は『こどものにわ』のワークは、学校の図工と違って、決められたことをやるのではなく、とにかく自由なところが楽しい。『こどものにわ』の活動のおかげで国語などほかの教科でもアイデアが出るようになりました。」と笑顔で語ってくれた。



榎田拓哉（くしだ たくや）

福島県二本松市出身。多摩美術大学卒業。2000年に造形教室「こどものにわ」を発足し「アート&育み&日常」をテーマに子どもたちの指導を行っている。2008年から羽村市在住。

「正解」のない作品作り

東京都中野区鷲ノ宮。ここに榎田さんの活動拠点の一つ「こどものにわ」がある。夕方になると、学校の授業が終わった近所の小学生たちが続々とやって来た。ここでは幼児から中学生まで曜日ごとにクラスが分かれていて、合計約70人の子どもたちを榎田さんが一人で教えている。

「こどものにわ」での創作活動は「ワーク」と呼ばれている。この日のワークは、水面に油絵の具を垂らし、浮かび上がった模様を紙に写し取るというもの。でき上がった模様は、ある子どもには動物に見えたり、別の子どもには果物に見えたりする「正解」のない作品だ。榎田さんは子どもたちに作り方の手順は教



▲約10年前から飼い始めたベンガルワシミズクのオーマを連れて多摩川沿いを散歩する榎田さん。

いつか羽村でも

榎田さんが羽村に移住して来たのは今から10年前。現在、家族4人と、2頭の犬、そして2羽のフクロウと暮らしている。羽村の豊かな自然環境と子育て環境をとっても気に入っているという。

「郷土博物館の隣の土手を登って多摩川の景色を見た瞬間に『ここに住もう』と決めました。少し歩けば山もあり川もあり、鳥のさえずりが聞こえる羽村は、私たち家族にとって、とても暮らしやすい理想的な場所です。今は羽村で子育てを楽しみ一市民ですが、機会があればぜひ羽村でも『こどものにわ』のような活動をしたいですね。」

『次ページへ続く』

榎田 拓哉

特集 羽村×人

福島

榎田さんの生まれ故郷、福島県二本松市。東日本大震災では、この街も被害を受けた。榎田さんは震災直後から遊びとアートを通じて子どもたちの支援を続けている。今回、榎田さんと同行して二本松市内の保育園を訪ねた。



『こどものにわ』の原点は福島にありました。

震災後、子どもたちは外で遊べなくなりました

「震災が起こるまでは、福島に戻って活動する事は考えたことがありませんでした。しかし、震災をきっかけに、子どもたちのためにできることがあるんじゃないかと思うようになりました。」と榎田さんは振り返る。

福島県の保育園や幼稚園では、震災後放射線の影響から、子どもたちは外で遊ぶことを制限され、土や水、植物など外にあるあらゆるものに触れることも制限された。そうした中、榎田さんの呼び掛けで全国各地から自然物や土が集まり、福島の子どもたちに届けた。「幼少期に土などの自然と触れ合う事は子ども達の成長にとってとても大切な事です。」と語るの二本松市立あだち保育園の園分恵子園長だ。「榎田先生が最初に土を持って来てくれた当時は、子どもたちは土に触れることに抵抗があったようでした。ですが、現在では全身泥まみれになって遊んでいます。泥遊び以外にもさまざまな遊びを教えてください。だき、榎田先生のおかげで子どもたちのチャレンジ精神が培われているように感じます。」

ワークショップの参加者は3千人以上

榎田さんは、平成25年に二本松市で子どもたちのための遊びと創作の場「ふくしまグリーン」

キャンパス」(平成29年にNPO法人化)を立ち上げ、月3回、小学生を対象とした造形教室を開いている。また、福島県内の保育園や幼稚園を訪問して「こどものにわ」で行っているような造形ワークショップや、フクロウを使った触れ合いの場を設け、この7年間でワークショップに参加した子どもは延べ3千人にも上った。



▲宮崎県都城市立図書館の「こどものにわ」。連日多くの子どもたちでにぎわっている。

「にわ」から外の世界へ

榎田さんの活動は日本各地へ広がっている。今年4月にオープンした宮崎県の都城市立図書館には、「こどものにわ」スペースが設置され、榎田さんが監修した「感性を育む道具箱」をはじめ、子どもたちの発想力を引き出すさまざまな遊びが用意されている。

「子どもたちには、いつか外の世界へ飛び出して森や街を見ることもっと可能性を広げてほしい。その原点が『こどものにわ』であればいいなと思います。」と榎田さんは語った。



▲全国から集めた土や葉っぱ、貝殻などで福島県をかたどったワークショップ作品。

